

# 国立国語研究所学術情報リポジトリ

## 南琉球八重山語における三型アクセント体系のさらなる報告

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立国語研究所 公開日: 2024-07-12 キーワード (Ja): 八重山語, アクセント, N型アクセント体系, 韻律語, 琉球祖語 キーワード (En): Yaeyaman, lexical prosodic system, n-pattern prosodic system, prosodic word, proto-Ryukyuan 作成者: セリック, ケナン, 麻生, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15084/0002000281">https://doi.org/10.15084/0002000281</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-ShareAlike 4.0 International License.



## 南琉球八重山語における三型アクセント体系のさらなる報告

セリック ケナン<sup>a</sup>      麻生玲子<sup>b</sup>

<sup>a</sup> 国立国語研究所 研究系

<sup>b</sup> 名桜大学／国立国語研究所 共同研究員

### 要旨

南琉球諸方言のアクセント体系を正しく記述するためには、本土諸方言や北琉球諸方言とは異なる理論的枠組みとそれに基づいた調査法が必要であることが判明しつつある（松森 2015, 2016a, 五十嵐 2016 など）。しかし、八重山地域ではこの新しい理論的枠組みと調査法を用いた研究がなされていない方言が残っており、それらの方言のアクセント体系は正しく記述されていない可能性が残る。本稿では以上の点を踏まえ、二型アクセント体系を持つとされてきた八重山語の4つの方言（大浜、宮良、石垣四箇、西表古見）を取り上げ、これらの方言では、①3つのアクセント型が区別されており、②「韻律語」という韻律単位（五十嵐 2015, 2016）が機能しているという2点を明らかにする。その過程で対象方言のアクセント体系について新しい音韻的解釈を提示した上で、琉球祖語に再建されるアクセント類との通時的関係について簡単に指摘する\*。

キーワード：八重山語、アクセント、N型アクセント体系、韻律語、琉球祖語

### 1. はじめに

南琉球八重山語に属する石垣四箇（以下、石垣）、大浜、宮良、古見の諸方言は、これまで2つのアクセント型が区別される二型アクセント体系を有するとされてきた（上村 1959, 秋永 1960, 平山・中本 1964, 平山他 1967, セリック他 2022, セリック・麻生 2023a）。具体的に言うと、語頭辺り（1モーラ目か2モーラ目の直後）に「下がり目」が指定されている「下降型」と、ピッチ変動が指定されておらず、語全体が平坦に発音される「平板型」<sup>1</sup>が区別されるという。表1に先行研究の記述に基づき、それぞれの方言における型の実現を示し、現代の宮良方言の語例を（1）に挙げる。なお、以下では、「○」は1モーラ、「▷」は1モーラの接語、「[」と「]」はピッチの局所的な上昇と下降を示し、「=」と「+」はそれぞれ接語境界と複合語境界を表す。平坦な音調に対してはピッチ記号を付さない。なお、例において提示するアクセント資料が接続形であ

\* 本稿の一部はJSPS 科研費 JP22KF0370, JP21H00353, JP20H01259, JP23K12167, JP19H05353, JP18K12390, 国立国語研究所の共同研究プロジェクト「実証的な理論・対照言語学の推進」（プロジェクトリーダー：浅原正幸）のサブプロジェクト「日本・琉球語諸方言におけるイントネーションの多様性解明のための実証的研究」（プロジェクトリーダー：五十嵐陽介）、「消滅危機言語の保存研究」（プロジェクトリーダー：山田真寛）の研究成果である。『石垣方言辞典』のデータをご提供くださった狩俣繁久先生に感謝申し上げます。本稿は日本語学会 167 回大会にて「南琉球八重山語における三型アクセント体系のさらなる報告」と題し発表した内容に加筆・修正を行ったものである。なお、著作権者である日本語学会の許諾を得て投稿したものである。

<sup>1</sup> 平山・中本（1964）、平山他（1967）の記述では石垣、大浜、宮良についてピッチ変動のない型を「低平型」と命名しているが、セリック他（2022）とセリック・麻生（2023a）に従って「平板型」に改める（「低平型」の命名をめぐってはセリック・麻生（2023a：注2）を参照）。なお、平山他（1967）では、古見方言の型に対して名称が与えられていないため、表1では、下降型でない型を暫定的に「平板型」にまとめる。

る場合、すなわち、文が続くことを「...」の記号で示す。

表1 対象方言のアクセント体系（平山・中本（1964）、平山他（1967）より）

方言	下降型	平板型
石垣	[○]○	○○
	[○]○▷	○○▷
大浜	[○]○	○○
	[○]○▷	○○▷
宮良	[○]○	○○
	[○]○▷	○○▷
古見	[○]○	○[○]
	[○]○▷	○[○▷]

(1) 宮良方言におけるアクセント型の区別（セリック他 2022: 162 より）

- a. 下降型：mai]=nu ... 「米の ...」, idzu]=nu ... 「魚の ...」, pitu]=nu ... 「人の ...」, matsi]ri=nu ... 「祭りの ...」
- b. 平板型：ki:=nu ... 「木の ...」, jadu=nu ... 「戸の ...」, kaṭa=nu ... 「肩の ...」, nasabi=nu ... 「茄子の ...」

しかし、これらの研究結果は、名詞の単独発話や1モーラ接語が後続した発話という限られた環境の観察に基づいている。このような手法を用いると、アクセント型の基本的な対立数を正しく捉えられていない可能性が残される（五十嵐 2018）。実際、3種類のアクセント型が区別される南琉球の方言では、これらの環境がアクセント型の中和環境に該当している（宮古語多良間：青井（2017）、宮古語与那覇：松森（2013）、宮古語池間西原：Igarashi et al.（2018）、八重山語黒島：松森（2016a）、八重山語小浜：セリック・麻生（2023b）など）。従って、対象方言のアクセント体系が南琉球の多くの三型方言と同じ仕組みを持つならば、上記の環境がアクセント型の中和環境に該当することになる。

これに対し、調査範囲の幅を複合語に広げた松森（2015）と荻野（2022）は、それぞれ古見方言と宮良方言について、複合語では3通りの音調が観察されることを報告し、それに従って3種類のアクセント型が区別されている可能性を指摘している（例（2））。しかし、これらの研究に対しては、根拠となるデータが複合語に限られているという問題が指摘できる。アクセント体系全体を捉えるためには、複合語で観察される3つのアクセント型が単純名詞でも区別されるかどうかを検証する必要がある。

(2)	古見方言	宮良方言
a 型	mjaa]ku+p̄itu 「宮古の人」	mee]gu+muni 「宮古言葉」
b 型	jamatu+p̄itu 「大和の人」	jamadu+muni 「大和言葉」
c 型	patuma]+p̄itu 「鳩間の人」	hatuma+mu]ni 「鳩間言葉」

松森（2015: 76）・荻野（2022: 481）より抜粋、表記を一部改変

さらに、松森（2015）は、古見方言の韻律階層には宮古語諸方言と同様に、モーラより上位で、文節より下位の「韻律語」（prosodic word, 以下 PW）という韻律単位（五十嵐 2015, 2016）があるとし、この単位に基づき、各アクセント型の音韻的解釈を提示している（3）。

(3) 古見方言のアクセント型の解釈（松森 2015: 77）

〈a 型〉最初の PW の 2 つ目のモーラ（2 つ目のモーラがなければ 1 つ目）に【下降が】出現

〈b 型〉アクセント【下降】がない

〈c 型〉最初の PW の最後のモーラに【下降が】出現

南琉球の多くの方言について、アクセント体系を正しく記述するためには、韻律語を想定することが必要であることが示されてきた（宮古語与那覇：松森（2013）、宮古語多良間：五十嵐（2015）、宮古語池間西原：五十嵐（2016）、Igarashi et al.（2018）、八重山語黒島：松森（2016a）、宮古語上地：Matsumori（2019）、宮古語水納島：セリック（2020）、宮古語皆愛：セリック（2021）、八重山語小浜：セリック・麻生（2023b）など）。これらの方言のアクセント体系においては、韻律語が数える単位として機能している。すなわち、アクセント型を区別するピッチ変動の位置はモーラや音節ではなく、韻律語を数えて指定されている。韻律語は、音節より上位かつ、文節より下位の韻律的単位（五十嵐 2016）であり、宮古語多良間方言と池間西原方言についてその形成規則が「2 モーラ以上の語根・接語の左端に韻律語境界を挿入せよ」（五十嵐 2016: 38）のように定義されている。この規則に従って、2 モーラ以上の語根や接語は韻律語を形成するのに対して、1 モーラの接語は韻律語を形成せず、それに先行する語の韻律語に組み込まれる。上に挙げた方言では、韻律語という単位を想定しない限り、表層の音調パターンについて一般化ができない。

(4) に水納島方言の例を示す（韻律語の境界を「( )」で示し、枠文に入る対象語を「X」で示す）。この方言は低音調の有無と位置によってアクセント型が区別される。具体的には、低音調が無指定の a 型と、低音調がそれぞれ 2 番目と 1 番目の韻律語の末尾モーラに指定される b 型と c 型の 3 つのアクセント型が区別される（セリック 2020）。文節（1 つ以上の語根と 0 個以上の接語）が同じモーラ数でも、韻律語の構造によってピッチ変動の位置が異なることに注意されたい（例えば、X=nu=du と X=mai や、X=nu=gami と X=kara=du の環境では構造が異なる）。

(4) 韻律語で見た水納島の各アクセント型の実現（セリック 2020）

型	意味	X=ja...	X=nu=du...	X=mai...	X=nu=gami...	X=kara=du...
a 型	「洞窟」	(gama=a)	(gama=nu=du)	(gama)=(mai)	(gama=nu)=(gami)	(gama)=(kara=du)
b 型	「山」	(jama=a)	(jama=nu=]du)	(jama)=(ma]i)	(jama=nu)=(ga]mi)	(jama)=(kara=]du)
c 型	「船」	(fune=]e)	(funi=nu=]du)	(fu]ni)=(mai)	(funi=]nu)=(gami)	(fu]ni)=(kara=du)

松森（2015）が指摘しているように、古見方言についても、韻律語を想定することにより、複合語で観察される表層の音調パターンに対して妥当な音韻的解釈を与えることができる。しかし、古見方言に韻律語を想定すべきかどうかについて、さらなる検証が必要であると言えよう。具体

的に、ある体系において韻律語が数える単位として機能しているのであれば、(5) に示す特徴があると予測される。

(5) 韻律語を伴うアクセント体系に関する予測

- a) 単純名詞に1モーラ接語が後続する文節と、2モーラ以上の接語が後続する文節とで韻律的構造が異なり、それによってアクセントの実現パターンが異なりうる。
- b) 単純名詞に2モーラ以上の接語が後続する文節が、2つの構成要素から成る複合語の単独発話、あるいは1モーラ接語が後続する文節と同じ韻律的構造を持ち、それによってアクセントの実現パターンが一致する。

従って、ある体系において韻律語が機能していると主張するためには、(5) の特徴があるかどうかを検討することが不可欠である。そのためには、対象語を様々な接語と組み合わせたうえで、環境ごとに実現する音調パターンを調査する必要がある。

以上を踏まえて、本研究の目的は以下の2点に要約できる。すなわち、南琉球八重山語に属する大浜、宮良、石垣、古見の諸方言について、単純名詞に焦点を当てつつ、3つの型が区別されているかどうかという点と、上記の(5)を検証し、韻律語を想定すべきかどうかという点について論じることである。

## 2. 大浜方言（石垣島，石垣市大浜）

### 2.1 データ

大浜方言の話者は、ホームムニ伝承会の会長を務める昭和16年生れの前津栄昭氏である。データは2022年9月より2023年10月の間に実施した5回の対面調査で得られたものである。調査対象は基礎的な単純名詞（地名名詞，場所名詞，時間名詞を含む）および複合語であり，主な調査内容は語の単独発話と，対象語に焦点助詞 =du 「～ぞ」，主題助詞 =(j)a 「～は」，方向格助詞 =ke 「～へ」，奪格助詞 =kara 「～から」，引用助詞 =di 「～と」などを後続させた環境である。

### 2.2 結果

環境別における地名名詞の実現を(6)に示す。=du 「～ぞ」や=(j)a 「～は」が後続する環境では、2種類の音調、すなわち、語頭にピッチ下降が実現するパターンと、語全体がやや高いピッチで平坦に発音されるパターンが観察される(6a)。これは先行研究(セリック・麻生2023a)と同じ結果である。しかし、これに対して、単純名詞に=ke 「～へ」，=kara 「～から」が同じく後続する環境では3種類の音調が観察される。具体的に言うと、語頭にピッチ下降が実現するパターンと、形態素境界においてピッチの下降が実現するパターンと、文節全体がやや高いピッチで平坦に発音されるパターンが現れる(6b)。複合語の環境では、同様に3種類のパターンが実現する(6c)。

## (6) 環境ごとにおける a 型「宮良」, b 型「大和」, c 型「多良間」の実現

- a) X=du ... 「X ぞ ...」 X=ja ... 「X は ...」
- a 型: mjaa]ra=du ... mjaa]ra=a ...
- b 型: jamatu=du ... jamato=o ...
- c 型: tarama=du ... tarama=a ...
- b) X=ke=du ... 「X へぞ ...」 X=kara=du ... 「X からぞ ...」
- a 型: mjaa]ra=ke=du ... mjaa]ra=kara=du ...
- b 型: jamatu=ke=du ... jamatu=kara=du ...
- c 型: tarama]=ke=du ... tarama]=kara=du ...
- c) X+muni=du/n ... 「X+ 言葉ぞ／も ...」 X+muni=sii 「X+ 言葉で ...」
- a 型: mjaa]ra+muni=du ... mjaa]ra+muni=fi ...
- b 型: jamatu+muni=n ... jamatu+muni]=fi ...
- c 型: tarama]+muni=n ... tarama]+muni=fi ...

単純名詞に =ke 「～へ」、=kara 「～から」が後続する環境や複合語の環境において出現する 3 種類の音調パターンの出現は語彙的特性に依存していると言える。なぜならば、語彙項目を固定すると、実現する音調パターンが一貫するからである。調査対象の地名名詞に関して言うと、irimuti 「西表」、mjaaku 「宮古」は環境ごとに一貫して mjaara 「宮良」と同じパターンで実現し、同様に、hatuma 「鳩間」、fusuma 「黒島」、ukinaa 「沖縄」は一貫して tarama 「多良間」と同じパターンで実現する。これらの地名名詞は語の長さや音節構造が揃っていないことが問題点として挙げられるが、tunaru 「隣」が mjaara 「宮良」と同じパターンで実現している (tuna]ru=du ... 「隣ぞ ...」、tuna]ru=kara=du ... 「隣からぞ ...」など) ため、これらの環境で観察される音調パターンの違いは語の長さや音節構造で説明できない。従って、大浜方言において語彙的に対立する 3 種類のアクセント型 (a 型, b 型, c 型) が区別されると結論付けられる。この結論が妥当であることは、3 モーラ名詞に見られる 3 種類の音調が 2 モーラ名詞にも確認できることによっても裏付けられる (7)。

(7) 環境ごとにおける a 型「昨日」<sup>2</sup>, b 型「去年」, c 型「今」の実現

- X=ja ... 「X は ...」 X=kara ... 「X から ...」
- a 型: kinu]=ja ... kinu]=kara ...
- b 型: kudzu=ja ... kudzu=kara=du<sup>3</sup> ...
- c 型: nama=a ... nan]=kara<sup>4</sup> ...

<sup>2</sup>「昨日」は八重山の多くの方言では琉球祖語の A 類対応の型に分類される (ローレンス 2020)。

<sup>3</sup>「X から ...」の枠文を収録した際、焦点接語の出現をうまくコントロールできなかったため、焦点接語の付加の有無については揃っていないデータもある。ただし、後の議論で分かるように、=du は韻律語を形成しないため、アクセント型の実現には影響しないと考えられる。

<sup>4</sup>nama 「今」に =kara 「～から」が後続すると縮約が起き、「nan]=kara」と発音される。石垣四箇方言も同様である (宮城 2003: 706)。



以上を踏まえて、各アクセント型が環境ごとにどのように実現し、どのように解釈されるべきかを確認しておく必要がある。a型はどの環境においても実現する音調が一貫しており、語頭より第2モーラの直後にピッチの下降が実現する。従って、a型は語頭より第2モーラの直後に下降が指定されていると解釈できる。これに対して、b型とc型は、環境により実現が異なる。すなわち、環境によって、文節全体が平坦に発音されるパターンと、ピッチの下降が実現するパターンが出現する。c型は1モーラ接語の=du「～ぞ」や=ja「～は」が後続する環境ではb型と同じく平坦に発音され、その場合、b型と中和する。これに対して、=ke「～へ」、=kara「～から」や複合語の環境においては、形態素境界にピッチの下降が実現する。一方、b型は単純名詞に接語が後続する環境や、複合語に1モーラ接語の=du「～ぞ」や=n「～も」が後続する環境では平坦に発音され、複合語に=fii「～で」が後続する環境では接語の直前にピッチの下降が実現する。

上記より、大浜方言の韻律構造について、c型を例にとると、(5)に挙げた特徴が成立していることが確認できる。まず、c型の単純名詞は、1モーラ接語の=du「～ぞ」や=ja「～は」が後続する環境と、=ke「～へ」、=kara「～から」が後続する環境とでは実現が異なる(tarama=du「多良間ぞ」、tarama]=kara「多良間から」)。=ke「～へ」は1モーラの長さであるが、共時体系においてその古形に当たる2モーラの=kaiと自由に交替しているため、2モーラ接語に準じると考えられる。従って、(5a)が成立していると言える。次に、1モーラの接語=du「～ぞ」や=n「～も」が後続するc型の複合語は、2モーラの接語=karaが後続するc型の単純名詞と同じ実現を示している(tarama]+muni=n「多良間方言も」、tarama]=kara=du「多良間からぞ」)。従って、この2つの環境は同じ韻律構造を持つと解釈でき、(5b)が成立していると言える。これに対して、1モーラ接語の=fii「～で」が複合語に後続すると、1モーラ接語の=du「～ぞ」や=n「～も」が後続するときと異なるパターンが観察されることが問題になりそうである。しかし、=fii「～で」は、=ke「～へ」と同様に歴史的に2モーラである<sup>5</sup>ため、共時体系でも2モーラ接語に準じた韻律的振る舞いを見せているとも考えられる。以上により、大浜方言において韻律語が機能する韻律構造を想定することが妥当である。(8)に韻律語境界を示して(6)を再掲する。

(8) 環境ごとにおけるa型「宮良」、b型「大和」、c型「多良間」の韻律構造と実現

a) 1つの韻律語が形成される環境

(X=du)「Xぞ」 (X=ja)「Xは」

a型：(mjaa]ra=du) (mjaa]ra=a)

b型：(jamatu=du) (jamato=o)

c型：(tarama=du) (tarama=a)

<sup>5</sup> 宮古語多良間=fii「～で」(渡久山・セリック 2020)など。

## b) 2つの韻律語が形成される環境

(X)=(ke=du)「Xへぞ」 (X)=(kara=du)「Xからぞ」 (X)+(muni=du/n)「X+言葉ぞ／も」

a 型: (mjaa]ra)=(ke=du) (mjaa]ra)=(kara=du) (mjaa]ra)+(muni=du)

b 型: (jamatu)=(ke=du) (jamatu)=(kara=du) (jamatu)+(muni=n)

c 型: (tarama])=(ke=du) (tarama])=(kara=du) (tarama])+(muni=n)

## c) 3つの韻律語が形成される環境

(X)+(muni)=(fi)「X+言葉ぞ／も」

a 型: (mjaa]ra)+(muni)=(fi)

b 型: (jamatu)+(muni)=(fi)

c 型: (tarama])+(muni)=(fi)

(8) より、b 型と c 型を以下のように音韻解釈することが可能となる。すなわち、c 型は第 1 韻律語の末尾モーラの直後にピッチの下降が実現する。これに対して、b 型は第 2 韻律語の末尾モーラの直後にピッチの下降が実現する。そして、韻律語が 1 つだけ形成される環境では、c 型の下降が実現しないため、c 型と b 型とが中和する。大浜方言のアクセント体系の音韻的解釈は (9) のようにまとめられる。なお、位置による対立は b 型と c 型に限るため、a 型をピッチの変動が指定されていない型として分析することも可能であろう。

## (9) 大浜方言のアクセント体系の音韻的解釈

a 型: 語頭より第 2 モーラの直後に下降が指定されている

b 型: 第 2 韻律語の直後に下降が指定されている

c 型: 第 1 韻律語の直後に下降が指定されている

## 2.3 アクセント型の分布と通時的対応

前節では、大浜方言では 3 つのアクセント型が区別されることを見てきた。しかし、各アクセント型に分類される語のグループを検討すると、少なくとも単純名詞において各アクセント型の分布が均等ではないことが分かる。つまり、a 型や c 型に分類される語が多数見つかるのに対し、b 型に分類される語は限られる。これまで調査で確認できた b 型の単純名詞を (10) に示す。南琉球の他の方言（八重山語と那国方言や宮古語水納島方言など）との対応関係からして b 型での実現が期待される suma「島」や jama「山」などは全て c 型で実現している。その一方で、複合語を見ると、c 型に対する b 型の語が多数見つかる (11)。

- (10) 大浜方言における b 型の単純名詞: jaa「家」, taa「田んぼ」, kjuu「今日」, kudzu「去年」, atsa「明日」, en「来年」, jamatu「本土」



## (11) b 型と c 型の複合語

- a) b 型に分類される複合語: nudu+buni 「のどほとけ」<sup>6</sup>, udi+buni 「腕骨」, gaja+jaa 「茅葺きの家」, jama+duru 「山鳥」, aba+nabi 「揚物用の鍋」, munu+gutu 「物事」, suma+muni 「方言」…
- b) c 型に分類される複合語: duu]+buni 「体の骨」, sira]+jaa 「お産のある家」, kaara]+jaa 「瓦葺きの家」, ujaki]+putu 「金持ちの人」, toofu]+mami 「豆腐豆」, baso]+kin 「芭蕉の着物」, atu]+turu 「後継者」…

八重山諸方言に観察されるアクセントの区別は、琉球祖語より継承された区別であると考えられており、これまでの研究から、琉球祖語にあったと想定される3つのアクセントのグループをA系列、B系列、C系列（またはA類、B類、C類）と呼んでいる（松森 2000a, 2000b, 2012）。八重山諸方言の中でも与那国方言（上野 2010）と小浜方言（セリック・麻生 2023b）は、琉球祖語に再建される3通りのアクセントの区別を保持していると報告されており、八重山祖語にも3つのアクセント型を再建する必要がある。大浜方言のa型、b型、c型は八重山祖語に再建される3つのアクセント型の区別を継承したものである。しかし、大浜方言のアクセント体系において型の顕著な偏りが存在することを指摘する必要がある。つまり、上述のように、大浜方言ではb型と期待される単純名詞の多くがc型に分類されるため、単純名詞においてb型がc型に合流しつつあると解釈できる。これに対し複合語では、b型がc型に合流していないようである。つまり、単純名詞において、b型とc型の区別が失われつつあるのに対して、複合語の方ではその区別が保持されているという状態である。

## 3. 宮良方言（石垣島、石垣市宮良）

## 3.1 データ

宮良方言の話者は、昭和21年生の男性である。データは2023年1月より6月までの間に実施した7回の対面調査で得られたものである。調査内容は大浜方言と同じであるが、そのデータに加えて『メーラムニ』（石垣 2013）の全項目を読み上げたデータも収録している。

## 3.2 結果

宮良方言は、大浜方言と同様の結果が得られた（12）。各アクセント型の実現は大浜と同じなので、議論は繰り返さないが、（12）のデータより、宮良方言でも、3種のアクセント型が区別されることと、韻律語が機能していることが確認できる。結果として、各アクセント型の音韻的解釈は大浜と同じものを想定できる（13）。

<sup>6</sup> \*nodo は琉球祖語にC類として再建されている（五十嵐 2019）ため、それを前部要素に含んだ複合語はc型に分類されることが期待される。しかし、大浜方言の共時体系においてはb型に分類される。鳩間方言についても同様の現象があると指摘されており（セリック 2023）、八重山語諸方言においてC類の語を前部要素に含む複合語の一部が共時的にb型に変わっている可能性がある。

## (12) 環境ごとにおける a 型「宮古」、b 型「沖縄」、c 型「多良間」の実現

- a) X... 「X...」  
 a 型: mee]gu ...  
 b 型: ukinaa ...  
 c 型: tarama ...
- b) X=gee ... 「X へ ...」 X=gara ... 「X から ...」  
 a 型: mee]gu=gee ... mee]gu=gara ...  
 b 型: ukinaa=gee ... ukinaa=gara ...  
 c 型: tarama]=gee ... tarama]=gara ...
- c) X+muni=ja ... 「X+ 言葉は ...」 X+muni=gara ... 「X+ 言葉から ...」  
 a 型: mee]gu+muni=ja ... mee]gu+muni=gara ...  
 b 型: ukinaa+muni=ja ... ukinaa+muni]=gara ...  
 c 型: tarama]+muni=ja ... tarama]+muni=gara ...

## (13) 宮良方言のアクセント体系の音韻的解釈

- a 型: 語頭より第 2 モーラの直後に下降が指定されている  
 b 型: 第 2 韻律語の直後に下降が指定されている  
 c 型: 第 1 韻律語の直後に下降が指定されている

大浜方言と同様に、宮良方言でも b 型に分類できる単純名詞は限られている。さらに、限られた b 型の単純名詞が、c 型の音調で実現することもある (14)。他方言との対応関係から b 型が期待される一部の語は、一貫して c 型で実現する (kii, kii]=gara 「木、木から」、mami, mami]=gara 「豆、豆から」、aba, aba]=gara 「油、油から」など)。つまり、これらの語は「本来」の c 型の語 (nabi, nabi]=gara 「鍋、鍋から」、funi, funi]=gara 「船、船から」など) とは区別できなくなっていると言える。

- (14) a) 一貫して b 型で実現する語: kjuu 「今日」、attsu 「明日」、jaa 「家」、ukinaa 「沖縄」  
 b) b 型でも c 型でも実現する語: jama 「山」、sima 「島」、jamadu 「大和」

その一方、複合語では b 型と c 型の区別が単純名詞より明確である (15)。特に、b 型が期待される単純名詞が c 型で実現していても、それを前部要素に含む複合語は一貫して b 型で実現し、本来の c 型語を前部要素に含む複合語と対立する例が多く見つかる (「油」対「オニオコゼ」など)。

## (15) 宮良方言における b 型と c 型の複合語

- a) b 型: aba+nabi 「油鍋」、gaja+jaa 「茅葺き」、joi+jaa 「祝いのある家」、panari+dzima 「離島」...

- b) c 型:aba]+idzu 「オニオコゼ」<sup>7</sup>, atu]+tudzu 「後妻」, ujagi]+jaa 「金持ち」, kaara]+jaa 「瓦葺き」...

#### 4. 石垣方言（石垣島，石垣市四箇）

##### 4.1 背景

石垣四箇方言のアクセントに関しては、平山他（1967）によって、下がり目が指定されている「下降型」と、下がり目が無指定の「平板型」が区別されると報告されて以来、アクセント体系を対象とした記述研究は管見の限り見当たらない。幸いなことに、『石垣方言辞典』（宮城 2003）には、収録されている約 17,600 項目と 2 万点弱の例文に対して、単独発話と例文におけるピッチ変動に関する情報が「´」の記号で記されている。例として「嫁」の項目を（16）に示す。ピッチ変動の認定は、石垣方言の母語話者であり、大正 9 年生まれの実著者宮城信勇氏の実際の発音に基づき、監修を務めた言語学者の加治工真市氏が行っている（宮城他 2002: v, 宮城 2003: vii）<sup>8</sup>。このため、認定の精度が保証されていると考えられ、辞典に含まれるデータをアクセント資料として使用することは適切であると言える。さらに、辞典には例文が豊富に収録されているため、名詞と接語の様々な組み合わせなどについてアクセント型の実現を確認することが可能である。これによって、石垣方言のアクセント体系を詳細に分析することができる。

- (16) ユ´ミ [ju´mi] (名) 嫁。´ユミ´ファー´jumi´fa: (嫁子) とも言う。´ユ´ミ ´サー´ルンデ ´シー´ソングドウ ´トゥミラル´ン [ju´mi ´sa:´runde ´ʃi:´songadu ´tumiraru´ŋ] (嫁を貰おうとしているのだが探せない)。´ミードゥナーヤ ´メ ´ユミ´ ナリ ´ハリッ´タ [mi:duna:ja me jumi´ nari ´harit´ta] (女の子はもう嫁になって行った)。´ユ´ミ ´コーピットウ´ヌドウ ´ウラ´ン [ju´mi ´ko: piʈu´nudu ´ʔura´ŋ] (嫁として求める人がいないのだ)。(宮城 2003: 1184)

以下では、『石垣方言辞典』のデータを用いて、特に単純名詞に焦点を当てつつ、石垣方言が 3 つのアクセント型を区別していることと、アクセント体系において韻律語が機能していることを示す。なお、表記はピッチ記号を「[´]」に置き換える点以外は『石垣方言辞典』に従う。

##### 4.2 方法

はじめに『石垣方言辞典』に含まれる例文から、名詞と =kai 「～へ」あるいは =kara 「～から」のみで構成される文節を全て抽出した。その結果、1027 個の文節が得られた。次に、それぞれの文節について、その音調パターン、文節が含む名詞の項目 ID、モーラ数、単独発話の音調などの情報を付与した上で、2 モーラと 3 モーラの名詞を含む文節を抽出した。最後に、複合語あるいは複合語に由来する名詞を含む文節を除外した（17）。この結果、異なり語数 213 語（2 モー

<sup>7</sup> aba は琉球祖語に再建される \*apa 「オニオコゼ」に対応する。竹富 ʔpa (ローレンス 2013), 水納 apa (セリック・大浦 2022), 伊江島 ʔapp'a (生塩 1999), 与論 apa (菊・高橋 2005) など。

<sup>8</sup> この作業の様子については外間 (2004: 256–257) を参照されたい。

ラ名詞 144 語, 3 モーラ名詞 69 語) の名詞を含む 738 個の文節が分析対象として得られた。

(17) 分析対象から除外した複合語および複合語由来の名詞

[ʔu]ndza 「そいつ」, [ʔuru]dza 「そいつ」, [ʃi]nta 「後方」, [ma]nta 「前方」, [mai]ta 「前方」, [ʔi]nta 「西方」, [hai]ta 「南方」, [ʔa]:nta 「東方」, [hanagi 「花木」, [matsi]ja 「町屋」, [nakadza 「台所 (中座)」, ta[kadi 「高い所 (高手)」, [tibaʔu 「糸柁 (手柁)」, [ʃibatsi 「火鉢」

### 4.3 結果

まず、対象となる 213 語について辞典で報告されている単独発話の音調パターンを見ると、先行研究 (平山他 1967) の通り、ピッチの下降が実現するパターン (F・78 語) と、語全体が平坦に発音されるパターン (H・135 語) の 2 つのパターンがあることが確認できる (18)。この 2 つのパターンはそれぞれ下降型と平板型に対応する。

(18) 単独発話における音調パターン

- a) 下降が実現する語 (下降型): [ka]ma 「あそこ」, [ʔu]i 「上」, [na]ka 「中」, [pi]tu 「人」, [ʔu]ri 「それ」, [ku]ri 「これ」, [ʔu]ŋ 「その時」, [wa]nu 「君」, [ta]bi 「旅」, [mu:]ru 「みんな」, [ʔi]:ri 「西」, [ʔa]:ri 「東」, [tu]:sa 「遠さ」, [ka:]ma 「遠方」, [ka:]ra 「川」, [ka]tatsi 「形」, [ku]:sa 「幼少期・貧窮」, [ʃigu]tu 「仕事」...
- b) 平坦に発音される語 (平板型): kuma 「ここ」, banu 「私」, mai 「前」, munu 「もの」, ʔatu 「後」, ʔuka 「外」, hai 「南」, kju: 「今日」, matsi 「市場」, ʔadza 「側」, siika 「四箇」, kudzu 「去年」, dzi: 「地」, ta: 「田」, haʔai 「畑」, jarabi 「子供」, ʔutudu 「弟妹」, mukasi 「昔」, jakuba 「役場」, ʔattsa 「明日」, jamatu 「本土」...

続いて、これらの語に =kara 「～から」や =kai 「～へ」が後続する文節では、ピッチ変動の有無に限って言うと、2 通りのパターンが観察される。すなわち、文節のどこかにピッチの下降が実現するパターン (以下「F」) と、文節全体が平坦に発音されるパターンが見られる (以下「H」)。表 2 に、パターン別の語数を示し、(19) から (22) に具体的な語リストを提示する (トークンが 2 つ以上の場合、その数をブラケット内に示す)。

表 2 環境・パターンごとの語数

単独発話	語数	枠文	語数
F	78	F	78
		F	111
H	135	H ~ F	6
		H	18

- (19) 単独 F・枠文 F (78 語): kama 「あそこ」 (33), ʔui 「上」 (27), naka 「中」 (27), pitu 「人」 (25), ʔuri 「それ」 (24), kuri 「これ」 (17), ʔuŋ 「その時」 (15), wanu 「君」 (13), tabi 「旅」 (11), sita 「下」 (10), mitsi 「道」 (10), kata 「方向」 (8), kaŋ 「あそこ」 (7), tiŋ 「天」 (6),

- φa: 「子」(5), ?utsi 「内」(4), nisi 「北」(4), φutsi 「口」(4), kari 「あれ」(3), tʃibi 「尻」(3), turi 「鳥」(3), mai 「米」(3), ?itsi 「いつ」(2), kadzi 「風」(2), ki: 「卦」(2), taki 「竹」(2), nunu 「布」(2), haku 「箱」(2), midzi 「水」(2), ?usi 「牛」, ka: 「井戸」, kaku 「四角」, kinu 「昨日」, kusī 「背中」, kuni 「国」, kwaŋ 「棺」, ʃira 「稲むら」, dai 「代」, taru 「誰」, tsī: 「釣針」, tsidzi 「頂き」, dusi 「友達」, niŋ 「年」, nuki 「貫き」, haka 「墓」, p̄a:ta 「縁」, pana 「先端」, pu: 「毛虫の一種」, mutsi 「餅」, mura 「村」, muŋ 「もの(被修飾形)」, jui 「結い」, ju: 「世」, juku 「横」, juda 「枝」, jumi 「嫁」, ?nni 「胸」 / mu:ru 「みんな」(14), ?i:ri 「西」(6), ?a:ri 「東」(4), tu:sa 「遠さ」(4), ka:ma 「遠方」(2), ka:ra 「川」(2), katatsi 「形」(2), ku:sa 「幼少期・貧窮」(2), ʃigutu 「仕事」(2), tunari 「隣り」(2), hadzimi 「始め」(2), ?o:ra 「上手」, ki:ʃu 「卦書」, kuʃa: 「後方」, go:ri 「穴」, dza:ri 「うろ」, duttu 「鶏」, pibidza 「山羊」, bunari 「姉妹」, φuniŋ 「蜜柑」, ma:ri 「周り」
- (20) 単独 H・粹文 F (111 語) : kuma 「ここ」(21), mi: 「目・穴」(21), banu 「私」(17), mai 「前」(16), munu 「もの」(15), ?atu 「後」(12), ?uja 「親」(9), nama 「今」(6), nudu 「喉」(6), ?mma 「馬」(5), ?uma 「そこ」(4), suru 「知る」(4), ?oŋ 「御嶽」(3), ki: 「木」(3), ʃidza 「兄」(3), ni: 「根」(3), no: 「何」(3), φuni 「船」(3), miŋ 「耳」(3), ?iŋ 「犬」(2), kami 「瓶」(2), k̄sa 「先刻」(2), siŋ 「芯」(2), fe: 「辺り」(2), dzo: 「門」(2), tida 「太陽」(2), du: 「身・自分」(2), φuŋ 「国」(2), mutu 「元」(2), joi 「祝い」(2), ?iki 「池」, ?iʃa 「医者」, ?iʃu 「磯」, ?itʃa 「(布の) 束」, ?iru 「色」, ?eŋ 「来年」, ?o: 「豚」, ka: 「皮」, kai 「陰」, ka:tsi 「歩道」, kimu 「肝」, kiŋ 「着物」, ki:ta 「桁」, ku: 「粉」, kyutu 「事」, kuŋ 「ここ」, dzima 「どこ」, si:ri 「汁」, ʃu: 「父」, s̄uku 「底」, taki 「丈」, tani 「種」, taru 「男の名」, ts̄ika 「柄」, tiri 「筈」, tusi 「年」, naŋ 「今」, nuŋ 「蚤」, hana 「花」, bi: 「注ぎ口」, pigi 「節穴」, p̄iki 「竿秤」, φusi 「櫛」, puni 「骨」, pe: 「綜」, mata 「股」, matsi 「松」, miʃu 「味噌」, ju: 「夜」, jubi 「夕べ」, ?nta 「土」 / ha:tai 「畑」(7), jarabi 「子供」(5), ʃikiŋ 「世間」(4), ?utudu 「弟妹」(3), mukasi 「昔」(3), jakuba 「役場」(3), ?imiʃa 「幼少の時」(2), to:ra 「台所」(2), minaka 「庭」(2), ?umuti 「表・顔」, gadzaŋ 「蚊」, kas̄iki 「こわ飯」, kado: 「こんなに遠く」, kamui 「梁」, kju:dzi 「給仕」, ku:ru 「蔵」, gusuku 「石垣」, kubin 「瓶」, kujusa 「幼少」, ʃi:tu 「生徒」, dziguku 「地獄」, ta:ra 「俵」, dabura 「脰脛」, tamunu 「薪」, tansi 「箆笥」, ts̄ikasa 「近い所」, ts̄itumi 「勤務」, ts̄iburi 「頭」, tʃabaŋ 「茶碗」, s̄s̄abu 「白保」, nikka 「今夜」, nussa 「遅く」, ha:tagi 「畑」, para: 「柱」, φusuma 「黒島」, matsini 「睫毛」, mujuri 「集会する場所」, jasiki 「屋敷」, junta 「民謡」, ?mboŋ 「ご飯」
- (21) 単独 H・粹文 H ~ F (6 語) : ja: 「家」(18・5), jama 「山」(6・2), suba 「側」(4・2), ʃi: 「後ろ」(1・1), sima 「島」(1・3) / ?ado: 「あれほど遠」(1・9)
- (22) 単独 H・粹文 H (18 語) : φuka 「外」(12), hai 「南」(6), kju: 「今日」(4), matsi 「市場」

(3), ʔadza 「側」(2), sika 「四箇」(2), kudzu 「去年」, dzi: 「地」, ta: 「田」, nu: 「野」, pama 「浜」／ʔattsa 「明日」(4), jamatu 「本土」(4), ʔasjitu 「明後日」, fino: 「自分の家」, pidari 「左」, jakada 「傍ら」, junaka 「夜中」

表2 および (19) から (22) の例より, 次のことが指摘できる。第一に, 数語 (6 語) を除き, 特定の語について観察される音調パターンには一貫性が認められる。例えば, kuma 「ここ」と  $\phi\ddot{u}ka$  「外」はそれぞれ 21 と 12 もの例文に出現しているが, 前者は一貫して下降のパターンで実現するのに対して, 後者は一貫して平坦のパターンで実現している (23) (24) (以下の例では, 括弧において該当例文が収録されている辞典の項目とその項目が掲載されているページ番号を示す)。この2語はともに場所を表し, 同じ意味領域に属していることと, それぞれの語が出現している例文において統語的環境の違いが見られないことなどを考慮すると, 同じ枠文で現れる音調パターンの違いは語彙的な違いによると解釈できる。つまり, 音調パターンの出現に一貫性が認められる以上, 観察される音調パターンの違いを語彙的な対立としてみなすことが妥当である。

(23) kuma 「ここ」を含む例文例

[kuma]kai [jut]tʃiku: 「こちらへよって来い」(ユツ`ツン・1178)

[kuma]kara [ʃim] pi[ki 「ここから線を引け」(シン・465)

(24)  $\phi\ddot{u}ka$  「外」を含む例文例

$\phi\ddot{u}$ [kakai ʔui]dafi paraʃi 「外へ追い出してしまえ」(ウイ`ダシウン・122)

$\phi\ddot{u}$ [kakara ki:]ka: ... 「外から来たら, ...」(パンシウリウ・825)

第二に, 環境別に出現する音調パターンから, 3つのアクセント類を想定せざるを得ない。単独発話において下降で実現する語は, =kara 「～から」や =kai 「～へ」が後続する枠文でも下降で実現しており, パターンが一貫している。しかし, これに対して, 単独発話において平坦な音調で実現する語は, =kara 「～から」や =kai 「～へ」が後続する枠文に置かれると, 2種類の音調パターンが観察される。すなわち, 語によって, 文節全体が平坦に発音されるパターンと, ピッチの下降が実現するパターンが観察される (上の (23) (24) を参照)。この結果より, 従来「平板型」とされてきたものには, 対立する2つのアクセント型が混在していることが分かる。単独発話は中和環境に過ぎず, =kara 「～から」や =kai 「～へ」が後続する環境では, 2種のアクセント型が対立しているのである。従って, 石垣方言の単純名詞は3種類のアクセント型 (以下, 単独 F・枠文 F : a 型, 単独 H・枠文 H : b 型, 単独 H・枠文 F : c 型) を区別していると結論できる。

次に, a 型と c 型の下降の異同について検討する必要がある。なぜならば, a 型と c 型は =kara 「～から」や =kai 「～へ」が後続する環境では, ピッチの下降が実現するという共通点を持っているからである。従って, a 型や c 型の語を含む文節に対してピッチの下降位置を (25) のように記号化し, 位置ごとの延べ語数を計算した。結果を表3にまとめる。



## (25) ピッチの下降位置

F0<sup>9</sup> : [ʔunu] pjtukai [tanumi] ka[ka]fa「その人に頼んで書いてもらいなさい」(ジューカキヤー・393)

F1 : [ka]makai [ha]ri 「あちらへ行け」(カ`イ・197)

F2 : [kama]kai [ha]ri. 「あちらへ行け」(カ`マ・243)

F3 : ja[rabi]kai [ʔa]mi [ʔa]:fa 「子供に飴を食べさせなさい」(ア`ミ・55)

表3 「X=kara ...」および「X=kai ...」における a 型と c 型の下降位置

アクセント型	モーラ数	F0	F1	F2	F3
a 型	2	5 (1.6%)	105 (34.5%)	194 (63.8%)	0
	3	0	1 (1.9%)	48 (92.3%)	3 (5.8%)
c 型	2	1 (0.5%)	16 (7.3%)	202 (91.8%)	1 (0.5%)
	3	0	0	3 (4.8%)	59 (95.2%)

少数のトークンを除き、2モーラのc型名詞はピッチの下降が第2モーラの直後に実現しており、3モーラのc型名詞はピッチの下降が第3モーラの直後に実現している。このことから、c型で実現している下降は、語末の直後に指定されていると解釈できる。3モーラのa型名詞は少数のトークンを除き、一貫してピッチの下降が第2モーラの直後に実現しており、3モーラのc型名詞と対立する。しかし、これに対して、2モーラのa型名詞は、2通りのパターンが観察される。最も頻繁に出現するパターンでは、ピッチが第2モーラの直後に下降する。この場合は、ピッチの下降位置が2モーラのc型名詞と同じであるため、中和が起きている可能性がある。もう1つのパターンでは、ピッチが第1モーラの直後に下降しており、その場合、c型との対立が保たれている。どのパターンが出現するかについては、一定の音韻的条件が関わっていると指摘できる。例えば、語頭の音節が無声化の適用条件<sup>10</sup>を満たしている語は、ほぼ一貫してF2のパターンで実現している(F1:3, F2:53)。その一方で、両方のパターンで実現する語(naka「中」F1:11, F2:16, kama「あそこ」F1:19, F2:14など)も存在しているため、a型の2モーラ名詞の実現について共時的な揺れを認める必要がある。この揺れの背景には進行中の通時的变化が関わっていると考えられるが、以上の結果により、a型で実現している下降はその位置が語頭(第1モーラか第2モーラ)に指定されていると解釈できる。

残る課題として、環境によるc型の音調交替(平板・下降)の説明がある。この課題は、韻律語という単位が機能しているかどうかという問題に関連している。従って、a型のkama「あそこ」およびc型のkuma「ここ」を対象に、これらの語を含む文節を抽出し、環境ごとにアクセント型の実現を調べた(表4)。a型は環境を問わず、一貫して語頭に下降が実現している。しかし、c型は環境により、2つのパターンが観察される。すなわち、1つまたは2つの1モーラ接語が後続する環境では、文節全体が平坦な音調で実現する。これに対して、2モーラ接語が後続する

<sup>9</sup> この実現は少数かつ対象文節が修飾されている環境に限る。

<sup>10</sup> 語頭音節が無声化するの、その母音が無声子音に挟まれる場合である。



環境では、形態素境界において下降が実現する。文節全体が同じ長さでも、その構造（名詞と2つの1モーラ接語、名詞と2モーラ接語）によって異なる音調パターンが実現している。このため、2モーラ接語は単位を成しており、1モーラ接語は単位を成さないという解釈が成立し、石垣方言にも韻律語という単位を想定することが妥当であると結論できる。

表4 環境ごとにおける kuma 「ここ」 および kama 「あそこ」 のアクセント型の実現

語	環境		実現
kama*	X	「X (単独)」	[ka]ma
	X=nu ...	「X の」	[kama]=nu (シェー・434)
	X=nu=du ...	「X がぞ」	[kama]=nu=du (シウダッサーン・410)
	X=kai ...	「X へ」	[ka]ma=kai (ヤガ`マッサーン・1132) [kama]=kai (カ`マ・243)
	X=kara ...	「X から」	[ka]ma=kara (ウジュ・140) [kama]=kara (ヤギンチョー・1134)
	X=ja ...	「X は」	[kuma:] (ミチウ`ドウミ・1074)
	X=nu ...	「X の」	[kuma]=nu (ジュー・393)
kuma	X=nu=du ...	「X がぞ」	[kuma]=nu=du (ナダッ`サーン・689)
	X=kai ...	「X へ」	[kuma]=kai (ユッ`ツン・1178)
	X=kara ...	「X から」	[kuma]=kara (シン・465)
	X=kara=du ...	「X からぞ」	[kuma]=kara=du (ミーツァニシャーン・1049)
	X=jaka=ŋ	「X よりも」	[kuma]=jaka=ŋ (シウダッサーン・410)

\* kama 「あそこ」 は 「X=ja ...」 「X=kara=du ...」 「X=jakan ...」 の環境を含む例文は見つからない

これまでの結果をまとめると、次の3つである。①石垣方言の単純名詞では3種類のアクセント型（a型、b型、c型）が区別されている。②a型は語頭に下降が指定されており、c型は1番目の韻律語の直後に下降が指定されている。③b型の単純名詞は、どの環境でも平坦な音調で実現しているため、下降が指定されていないと解釈できそうである。しかし、他の方言と同様に、b型の解釈をめぐるには、複合語におけるアクセント型の対立を確認した上で、b型に分類される複合語の実現を見ておく必要がある。

#### 4.4 複合語

複合語におけるアクセント型の対立を確認するために、宮城（2003）から pitu 「人」を後部要素に含む5モーラの複合語を抽出した。その結果、合計24語の複合語が得られた。2つの語根から構成される複合語は2つの韻律語を形成すると考えられるため、複合語にも単純名詞と同じアクセント型の対立が存在するならば、単独発話において次の3通りのパターンが観察されると予測される。すなわち、第2モーラの直後に下降が実現するパターン（a型）、形態素境界に下降が実現するパターン（c型）、複合語全体が平坦に発音されるパターンが観察されるはずである。各複合語の単独音調を表5に示すが、予測通りの結果が得られている。従って、複合語も3つのアクセント型を区別していると結論できる。

表5 pitu 「人」を後部要素に含む5モーラの複合語（単独発話における音調）

型	複合語	前部要素	
a 型	ʔu[ku]ri+p̄ītu	「葬送人」	N/A cf. [ʔuku]ruŋ 「送り」
	[jai]ma+p̄ītu	「八重山の人」	[jai]ma 「八重山」
	[m̄i:]di+p̄ītu	「巳生まれの人」	N/A cf. [m̄i:] 「巳年生まれ」
	[me:]ku+p̄ītu	「宮古の人」	[me:]ku 「宮古」
	[sugu]ri+p̄ītu	「優れた人」	N/A cf. [sugu]riŋ 「優れ」
	[tun]di+p̄ītu	「酉年生まれの人」	N/A cf. [tu]ri 「酉年生まれ」
b 型	ba[gari+p̄ītu	「分家」	[bagari 「別れ」
	[haram+p̄ītu	「妊婦」	N/A cf. [haramuŋ 「孕み」
	ja[matu+p̄ītu	「日本本土の人」	ja[matu 「本土」
	[jois̄i+p̄ītu	「祝いの客」	N/A cf. [joi 「祝いし」
	ju[kara+p̄ītu	「土族」	N/A cf. [jukaru 「良い」
	[kanai+p̄ītu	「万能な人」	N/A cf. [kanauŋ 「叶い」
	[ma:da+p̄ītu	「本当の人」	[ma:da 「本当の」
	[na:ri+p̄ītu	「漂流者」	[na:ri 「流れ」
	[tanum+p̄ītu	「雇っている人」	N/A cf. [tanumuŋ 「頼み」
	[taram+p̄ītu	「雇っている人」	N/A cf. [taramuŋ 「頼み」
	ts̄i[kuri+p̄ītu	「農夫」	ts̄i[kuri 「作り」
	ts̄i[kudi+p̄ītu	「農民」	ts̄i[kudi 「農業」
c 型	[ʔamari+p̄ītu	「居候」	ʔa[ma:ri 「余り」
	[mukas̄i+p̄ītu	「昔の人」	[mukas̄i 「昔」
	[ni:ra+p̄ītu	「地底の人」	[ni:ra 「あの世」
	[s̄ima:]p̄ītu	「離島の人」	N/A 「小島」
	[ʔuika+p̄ītu	「役人」	[ʔuika 「俸給」
	[ʔujaki+p̄ītu	「金持ち」	[ʔujaki 「富裕」

さらに、データは少ないが、b型の複合語に韻律語を形成する接語が後続すると、接語の直前にピッチの下降が実現する(26)。このため、b型を「2番目の韻律語の直後に下降する」のように解釈できる。

(26) ja[matu+p̄ītu]=jaka=ŋ ... 「大和人よりも ...」(ブリミー・973)

#### 4.5 石垣方言のアクセント体系

以上の結果に従って、石垣方言のアクセント体系についても大浜方言や宮良方言と同じ音韻的解釈を採用できる(27)。

(27) 石垣方言のアクセント体系の音韻的解釈

- a 型：語頭（第1モーラか第2モーラ）に下降が指定されている
- b 型：第2韻律語の直後に下降が指定されている
- c 型：第1韻律語の直後に下降が指定されている

#### 4.6 対応関係

石垣方言の単純名詞におけるアクセント型の分布を見ると、大浜方言や宮良方言に比べb型の分布が広いことが分かる((10), (14), (22)を比較されたい)。しかし、同様に、b型であることが期待されるにもかかわらず、専らc型の音調で実現する語(munu「物」, kan「神」, kin「着物」など)も多く見つかる。さらに、b型で実現する語の中には、例文によってc型で実現する語も見つかる(ja:「家」, jama「山」, suba「側」など)。この状況は、単純名詞においてb型の語がc型に合流するという変化が進行中であるということを示唆している。

### 5. 古見方言（西表島，竹富町古見）

#### 5.1 データ

古見方言の話者は、昭和10年生の女性である。データは2023年4月より7月までの間に実施した2回の対面調査で得られたものである。調査内容は、大浜方言や宮良方言と同じであるが、データが少ないため、古見方言のアクセント体系について不明な点が多く残っており、本稿で報告するデータや解釈は予備的な段階にある。

#### 5.2 結果

古見方言のアクセント体系は、これまで見てきた方言より実現がやや複雑であるが、アクセント型の対立数や韻律構造についてこれまでと同様の結果が得られた。単純名詞の実現を(28)に示す(「%」は小幅の上昇を表す)。

(28) 環境ごとにおけるa型「井戸」「水」、b型「家」「山」、c型「田」「喉」の実現

- a) X=n(u)=du ... 「Xがぞ ...」  
 a型: [kaa]=nu=du ...  
 b型: jaa=n=%du ... jama=nu=%du ...  
 c型: taa=nu=%du ... nudu=nu=%du ...
- b) X=ja ... 「Xは ...」  
 a型: [ka]a=ja ... [midzi]=ja ...  
 b型: jaa=[ja ... jama=[ja ...  
 c型: taa=[ja ... nudu=[ja ...
- c) X=kara ... 「Xから ...」  
 a型: [kaa]=kara ... [midzi]=kara ...  
 b型: jaa=[ka%ora ... jama=[kara ...  
 c型: [taa]=kara ... nu[du]=kara ...

1 モーラ接語の連続 =nu=du「～がぞ」が後続する環境では、2種類の音調、すなわち、語頭(1モーラ目か2モーラ目の直後)に大幅なピッチの下降が実現するパターンと、文節全体がほぼ平

板に発音されるパターンが観察される。1 モーラ接語である主題助詞 =ja が後続する環境でも同様に、下降パターンと、接語のみが高く発音される上昇のパターンが観察される。しかし、2 モーラ接語 =kara 「～から」が後続する環境では3種類の音調が区別される。1つ目は下降のパターンである。2つ目は接語が高く発音される上昇のパターンである。3つ目は語根の末尾音節が高く発音される上昇下降のパターンである。なお、CVVの音節構造を持つa型とc型の名詞はこの環境において中和しているが、他の環境の実現からして音韻的に対立していることが確かめられる。これらの観察から、単純名詞は3つのアクセント型が区別されると言える。この結果は、複合語でも同様に3種のアクセント型の対立が確認できることによって支持される(29)。なお、松森(2015: 77)では古見方言のb型を「アクセントがない」と解釈しているが、筆者らが得たデータからはb型は下降の位置によってc型と対立していると解釈される。

(29) 複合語における3種類のアクセント型

- a 型 : [mija]ra+muni=kara ... 「宮良方言から ...」
- b 型 : jama[tu+muni]=kara ... 「本土方言から ...」
- c 型 : tã[rama]+muni=kara ... 「多良間方言から ...」

古見方言の韻律構造についても1節の(5)に挙げた特徴が成立しているため、韻律語が機能していると言える。例えば、=nu「～の」、=na「～に」は、=ja「～は」と同じ振る舞いを見せ、=ngai「～へ」、=made「～まで」は、=kara「～から」と同じ振る舞いを見せている。さらに、単純名詞に2モーラ接語が後続する文節と複合語を含む文節とで、アクセント型の実現が一致している。さらに、c型の[taa]=kara「田から」やmi:[dun]=kara「女性から」などの実現からは、韻律語に指定されている上昇が「末尾モーラ」ではなく、「末尾音節」の直前に付与されていることが分かる。b型とc型の上昇パターン(上昇のタイミングに加え語頭分節音の有声性との相関など)についてさらなる検証が必要であるが、これまでの議論をまとめ、古見方言のアクセント体系の暫定版を(30)に提示する。位置による対立はb型とc型に限られるため、他の方言と同様にa型をピッチの変動が指定されていない型として分析することも可能である。

(30) 古見方言のアクセント体系の音韻的解釈(暫定版)

- a 型 語頭より第2モーラの直後に下降が指定されている
- b 型 第2韻律語の末尾音節が高い
- c 型 第1韻律語の末尾音節が高い

これまで見てきた他の方言と同じく、古見方言でも単純名詞においてb型に分類される語が少ない(他にはkjuu「今日」とatsa「明日」がある)。b型と期待されるmma「馬」、mun「麦」、mami「豆」、amba「油」、mussu「筵」などは全てc型で実現しており、単純名詞ではb型がc型に合流するという変化が相当進行していると考えられる。

## 6. おわりに

本稿では、二型のアクセント体系を持つとされてきた八重山語の4つの方言を取り上げ、新たな理論的枠組みおよび調査法を用い考察した結果、これらの方言が三型のアクセント体系を持つということに加え、各アクセント型の音韻的解釈を行うにあたっては、南琉球の多くの方言と同様に、韻律語を想定する必要があることを示した。この結果は、松森（2015, 2016b）で提示されている仮説、つまり、八重山諸方言の韻律体系において韻律語が機能していることと、南琉球祖語にまで韻律語を再建する必要があるという仮説を強く支持する。本稿の結果を受け、二型とされてきた残りの八重山語諸方言（真栄里、川平、竹富、船浮など）についても、同様の調査を実施すれば、同じ結果が得られることが期待される。

## 参考文献

- 秋永一枝（1960）「八重山方言一・二音節名詞のアクセントの傾向」『国語学』41: 121-125.
- 青井隼人（2017）「南琉球宮古多良間方言における2種類のアクセント型の中和」『国立国語研究所論集』13: 1-23.
- セリック ケナン（2020）「南琉球宮古語史」博士論文、京都大学.
- セリック ケナン（2021）「下地皆愛方言のアクセント体系に関する予備的報告」『言語記述論集』13: 215-290.
- セリック ケナン（2023）「鳩間方言の韻律体系の見直し：アクセント型の対立数などを巡って」第258回 NINJAL サロン、2023年10月7日、国立国語研究所.
- セリック ケナン・麻生玲子（2023a）「南琉球八重山語大浜方言のアクセント資料」『言語記述論集』15: 171-192.
- セリック ケナン・麻生玲子（2023b）「八重山語小浜方言の三型のアクセント体系について」令和5年度第1回「危機言語の保存と日琉諸語のプロソディー」合同研究発表会 2023年6月10日発表資料.
- セリック ケナン・麻生玲子・中澤光平（2022）「南琉球八重山語宮古良方言の名詞アクセント資料」『国立国語研究所論集』22: 157-176.
- セリック ケナン・大浦辰夫（2022）『みんなふつ語彙集』東京：国立国語研究所.
- 平山輝男・中本正智（1964）『琉球与那国方言の研究』東京：東京堂.
- 平山輝男・大島一郎・中本正智（1967）『琉球先島方言の総合的研究』東京：明治書院.
- 外間美奈子（2004）「石垣方言の擬音擬態語」『沖縄県立芸術大学附属研究所紀要』16: 241-257.
- 五十嵐陽介（2015）「南琉球宮古語多良間方言のアクセント型の記述」『比較日本文学文化研究』8: 1-42.
- 五十嵐陽介（2016）「南琉球宮古語池間方言・多良間方言の韻律構造」『言語研究』150: 33-57.
- 五十嵐陽介（2018）「これからの方言アクセント研究がなすべきこと」日本語学会 2018年度春季大会シンポジウム「日本語記述研究の未来—今なすべきこと—」発表資料.
- 五十嵐陽介（2019）「日琉語類別語彙（2019年5月17日版）」[https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase\\_contents/download/238738/1c06ac2d47e57c273c59391b8fdc2040/2862?col\\_no=2&frame\\_id=729332](https://researchmap.jp/multidatabases/multidatabase_contents/download/238738/1c06ac2d47e57c273c59391b8fdc2040/2862?col_no=2&frame_id=729332)（アクセス 2023年12月10日）
- Igarashi, Yosuke, Yukinori Takubo, Yuka Hayashi & Tomoyuki Kubo (2018) Tonal neutralization in the Ikema dialect of Miyako Ryukyuan. In: Haruo Kubozono & Mikio Giriko (eds.) *Tonal change and neutralization*, 83-128. Berlin & New York: Mouton de Gruyter.
- 石垣實佳（2013）『メーラム二用語便覧』石垣：南山舎.
- 菊千代・高橋俊三（2005）『与論方言辞典』東京：武蔵野書院.
- ローレンス ウェイン（2013）「竹富島方言アクセントと「系列別語彙」：附竹富島方言版「北風と太陽」」『琉球の方言』37: 1-24.
- ローレンス ウェイン（2020）「アクセント変化から見た琉球方言の系統樹と日本祖語音調から見た琉球祖語音調」シンポジウム「日琉諸方言系統論の展望」発表資料.
- 松森晶子（2000a）「琉球の多型アクセント体系についての一考察—琉球祖語における類別語彙3拍語の合流の仕方—」『国語学』51(1): 93-108.
- 松森晶子（2000b）「琉球アクセント調査のための類別語彙の開発—沖永良部島の調査から」『音声研究』4(1): 61-71.

- 松森晶子 (2012) 「琉球語調査用「系列別語彙」の素案」『音声研究』16(1): 30-40.
- 松森晶子 (2013) 「宮古島における3型アクセント体系の発見: 与那覇方言の場合」『国立国語研究所論集』6: 67-92.
- 松森晶子 (2015) 「南琉球の三型アクセント体系: その韻律単位に関する考察」『日本女子大学 紀要 文学部』64: 55-92.
- 松森晶子 (2016a) 「八重山諸島黒島方言アクセントの仕組み: その韻律範疇 PWd と下がり目の出現条件」『言語研究』150: 59-85.
- 松森晶子 (2016b) 「声調言語としての宮古祖語 - 特にその TBU として機能する韻律上の単位について」田窪行則・ジョン・ホイットマン・平子達也 (編) 『琉球諸語と古代日本語 - 日琉祖語の再建にむけて』149-172. 東京: くろしお出版.
- Matsumori, Akiko (2019) Prosodic unit, recursive structure, and nature of accent in Miyako Ryukyuan. *The Linguistic Review* 36(1): 51-83.
- 宮城信勇 (2003) 『石垣方言辞典』沖縄: 沖縄タイムス社.
- 宮城信勇・加土工真市・波照間永吉・西岡敏 (2002) 『石垣方言語彙一覧』文部科学省特定領域研究『環太平洋の「消滅に瀕した言語」にかんする研究調査研究』.
- 萩野千砂子 (2022) 「沖縄県石垣市宮良」セリック ケナン・木部暢子・五十嵐陽介・青井隼人・大島一 (編) 『日本の消滅危機言語・方言の文法記述』473-536.
- 生塩睦子 (1999) 『沖縄伊江島方言辞典』伊江村: 伊江村教育委員会.
- 渡久山春英・セリック ケナン (2020) 『南琉球宮古語多良間方言辞典』東京: 国立国語研究所 言語変異研究領域.
- 上村幸雄 (1959) 「琉球諸方言における「1・2音節名詞」のアクセントの概観」『ことばの研究』1: 121-140.
- 上野善道 (2010) 「琉球与那国方言のアクセント資料 (1)」『琉球の方言』34: 1-30.

## Still Another Report of Ternary Prosodic Systems in Southern Ryukyuan Yaeyama

CELIK Kenan<sup>a</sup>      ASO Reiko<sup>b</sup>

<sup>a</sup>Research Department, NINJAL

<sup>b</sup>Meio University / Project Collaborator, NINJAL

### Abstract

In the light of recent research, it has become increasingly clear that, in order to achieve an adequate description of the prosodic system of the Southern Ryukyuan dialects, a theoretical framework different from the one used for mainland and Northern Ryukyu dialects and corresponding research methods are necessary (Matsumori 2015, 2016a; Igarashi 2016, etc.). However, there are still dialects for which this new theoretical framework and research methods have not yet been applied, leaving the possibility that the prosodic system of these dialects are not accurately described. Taking these points into consideration, this paper investigates the prosodic system of four dialects of the Yaeyama language (Ohama, Miyara, Ishigaki Shika, and Iriomote-Komi) which have been described in the previous literature as possessing a binary prosodic system, and shows that: first, three different accent types are distinguished, and second, we need to postulate the prosodic unit called 'prosodic word' (Igarashi 2015, 2016). As a result of these findings, we propose a new phonological interpretation regarding the prosodic system of the dialects under investigation and we add some preliminary remarks concerning the prosodic correspondences of the synchronic accent types and the prosodic categories reconstructed for proto-Ryukyuan.

**Keywords:** Yaeyaman, lexical prosodic system, n-pattern prosodic system, prosodic word, proto-Ryukyuan